



執筆者: マーケット・プレイス・オフィス代表 立澤 芳男(たつざわ よしお)

流通系企業の出店リサーチ・店舗コンセプトの企画立案など、都市、消費、
世代に関するマーケティングの情報収集と分析
元「アクロス」創刊編集長。著書に「百万人の時代」(高木書房)等

2008年9月

第四回 今(いま)どきの高齢者

超・長寿老人、金持ち老人、時持ち老人、暴走老人・・・

新・老人神話が続々生まれる。

三千万人弱の老人パワーに注目せよ！

かつての老人神話は崩壊したと厚生白書(平成8年)で指摘されて以降も高齢者率はうなぎのぼりで上がり続け、平成20年には20%を超えた。今年平成20年では、70歳以上でも2000万人、100歳以上だけでも3万人を優に超えている。いよいよ本格的な高齢社会の到来である。

その本格的な高齢社会がまだまだ進行する中、世の中は、平成の長期大不況という背景もあり、高齢者に対し時間とお金に余裕があるということから妬みが生まれたり、また痴呆、寝たきりなどの高齢者に対する恨みや嫌悪から高齢者に対する蔑視、高齢者虐待がますます増えてきている。

21世紀の長寿社会、少子高齢化社会、自己責任・自己負担社会、実力主義社会、格差社会等々複雑で複合的な多面社会が、急増する高齢者に覆いかぶさってきている。もちろん現役世代や年少世代にも同様ではある。

しかし、人生設計を2ステップで人生を終えようとした現在の高齢者に、世の中は第3ステップを踏むように求める時代になっている。暴走老人、ラジカル老人が出てこないわけがない。

21世紀の新しい老人神話が生まれつつある。

| | | | |
|-----|-----------------------------------------------|----------------------------|----|
| I | データで見る高齢化社会 | 20世紀の後半に「高齢」社会に入った日本 | 2 |
| | 最新高齢者データ/データで読む高齢社会の問題(自己責任、自立が求められる) | | |
| II | 日本社会における老人・高齢者のイメージ | | 9 |
| | 老人イメージの変遷/「老」という文字の成り立ちとイメージ | | |
| III | いま(今)どきの高齢者たち | 新しい老人神話の誕生 | 12 |
| | 新・老人神話 1~7 老人は暴走・逆ギレする/老人が都市ジャックする/死亡者が増える など | | |
| ◆ | 執筆者コメント | 100歳以上人口と日本の自殺者数が同じ数字にビックリ | 20 |

I — データで見る高齢化社会 20 世紀の後半に「高齢」社会に入った日本

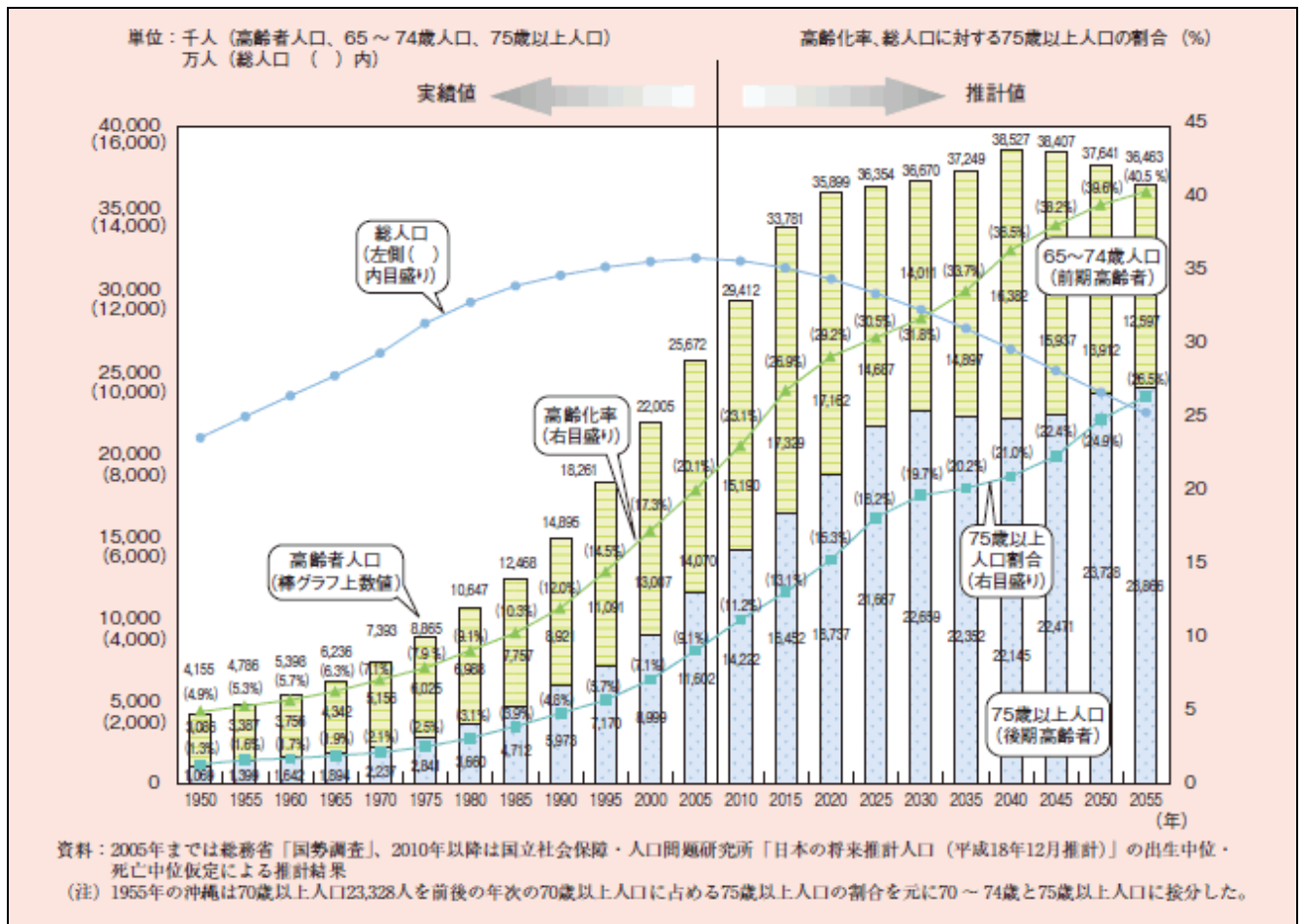
1. 高齢社会の概況

70 年代に高齢化社会に、90 年代に高齢社会に突入し、年少人口を上回った老年人口

- (1) 総人口に占める 65 歳以上人口の割合を「高齢化率(高齢者人口割合)」として、高齢化の程度を見ることが多い。ある国・地域において、高齢者が人口の 7%以上を超えると高齢化社会、14%を超えると高齢社会と呼ばれる。
- (2) 日本の戦後社会の高齢化率は、最低が昭和 25 年(1950 年)の 4.9%であったが、20 年後の昭和 45 年(1970)には 7.1%になり、WHOの定義する「高齢化社会」に突入した。
- (3) その後も高齢化率は上がり続け、平成 7 年(1995)年に高齢化率は 14.5%に達し高齢社会に入った。そして、高齢化率の上昇はさらに続き、平成 17(2005)年の国勢調査では 20.1%と 20%を超え、日本人の 5 分の 1 が 65 歳以上人口となった。一方で少子化も進んでおり、65 歳以上の老年人口(2570 万人)は、0~14 歳の年少人口(1752 万人)を大きく上回った。

▼21 世紀初頭から本格的な少子高齢社会に

—高齢化の推移と将来推計(高齢者白書平成 20 年版)—



▼高齢者人口は 2819 万人。高齢者比率は 22.1%に。

—高齢者人口及び割合の推移(昭和 25 年～平成 20 年)—

| 年次 | 総人口 (万人) | 高齢者人口 (万人) | | | | 総人口に占める割合 (%) | | | | 老年人口 指数 |
|-------------|-------------|------------|-------|-------|-------|---------------|-------|-------|-------|------------|
| | | 65歳以上 | 70歳以上 | 75歳以上 | 80歳以上 | 65歳以上 | 70歳以上 | 75歳以上 | 80歳以上 | |
| 昭和25年(1950) | 8320 | 411 | 234 | 106 | 37 | 4.9 | 2.8 | 1.3 | 0.4 | 8.3 |
| 30年(1955) | 8928 | 475 | 278 | 139 | 51 | 5.3 | 3.1 | 1.6 | 0.6 | 8.7 |
| 35年(1960) | 9342 | 535 | 319 | 163 | 67 | 5.7 | 3.4 | 1.7 | 0.7 | 8.9 |
| 40年(1965) | 9827 | 618 | 362 | 187 | 78 | 6.3 | 3.7 | 1.9 | 0.8 | 9.2 |
| 45年(1970) | 10372 | 733 | 435 | 221 | 95 | 7.1 | 4.2 | 2.1 | 0.9 | 10.2 |
| 50年(1975) | 11194 | 887 | 542 | 284 | 120 | 7.9 | 4.8 | 2.5 | 1.1 | 11.7 |
| 55年(1980) | 11706 | 1065 | 669 | 366 | 162 | 9.1 | 5.7 | 3.1 | 1.4 | 13.5 |
| 60年(1985) | 12105 | 1247 | 828 | 471 | 222 | 10.3 | 6.8 | 3.9 | 1.8 | 15.1 |
| 平成 2年(1990) | 12361 | 1493 | 981 | 599 | 296 | 12.1 | 7.9 | 4.8 | 2.4 | 17.3 |
| 7年(1995) | 12557 | 1828 | 1187 | 718 | 388 | 14.6 | 9.5 | 5.7 | 3.1 | 20.9 |
| 12年(2000) | 12693 | 2204 | 1492 | 901 | 486 | 17.4 | 11.8 | 7.1 | 3.8 | 25.5 |
| 17年(2005) | 12777 | 2576 | 1830 | 1164 | 636 | 20.2 | 14.3 | 9.1 | 5.0 | 30.5 |
| 19年(2007) | 12776 | 2743 | 1960 | 1268 | 712 | 21.5 | 15.3 | 9.9 | 5.6 | 33.0 |
| 20年(2008) | 12771 | 2819 | 2017 | 1321 | 751 | 22.1 | 15.8 | 10.3 | 5.9 | 34.2 |

資料(図1及び表2)

: 昭和25年～平成17年は「国勢調査」、平成18年～20年は「推計人口」

平成19年及び20年は9月15日現在、他の年は10月1日現在

注1) 昭和25年～平成17年の年齢階級別人口は、「国勢調査」の年齢不詳をあん分した人口。

2) 昭和45年までは沖縄県を含まない。

3) 老年人口指数 = $\frac{65歳以上人口}{15\sim64歳人口} \times 100$

▼「高齢社会」WHO(世界保健機構)の定義

高齢化社会と高齢社会

老人とは…WHO(World Health Organization、ダブリュウ・エイチ・オー、世界保健機構)によると65才以上を「老人」と定義。

老化とは…「加齢とともに臓器の機能が次第に衰えて、ついに環境に適応できなくなり、個体死に至る過程であり、老化は常に進行性で不可逆なものであると定義。

高齢化社会とは…その社会の構成員で65才以上(老人)の人が占める割合が7%を越える

高齢社会とは…65才以上の高齢者人口の割合が14%を越えた時の社会を高齢社会と定義

その定義に則れば、現在の日本社会はかなり進んだ「高齢社会」ということになる。

▼日本の老人(65才以上)の人口割合(厚生省推計)

| 1985年 | 2000年 | 2020年 |
|-------|-------|-------|
| 10% | 17% | 27% |

なお厚生労働省は平成18年簡易生命表において「日本の男性の平均寿命(ゼロ歳での平均余命)は79.00歳、日本の女性の平均寿命は85.81歳」と発表している。

2. 高齢者に関する最新のデータ

(1) 100歳以上が過去最多の3万6276人。女性が86%

*厚生労働省は08年9月12日、敬老の日(15日)に合わせ、今月末時点で100歳以上となる高齢者数を発表。

○男性は5063人、女性は3万1213人

過去最多の3万6276人(男性5063人、女性3万1213人)で、前年からの増加数も3981人と過去最多。女性が86%を占めるが、男性も初めて5000人を超えた。

○最長老は男性112歳(宮崎県在住)、女性113歳(沖縄県在住)

国内最高齢者は、男性が112歳の宮崎県都城市、田鍋友時(ともじ)さん=1895(明治28)年9月18日生まれ=で、07年1月にギネスブックで男性長寿世界一と認定されている。女性最高齢は沖縄県在住の113歳の女性=氏名非公表。

(2) 70歳以上が総人口の6人に1人の2017万人に。

*総務省は、敬老の日に合わせて65歳以上の高齢者人口の推計値(9月15日現在)を発表

○65歳以上人口は2819万人

65歳以上の高齢者は前年比76万人増の2819万人(男1203万人、女1616万人)と22.1%を占め、70歳以上は2017万人(男820万人、女1197万人)とやはり初めて2000万人を超え、総人口の6人に1人が70歳以上となった

○後期高齢者(75歳以上の人口)は、前年比53万人増の1321万人

75歳以上を男女別にみると男性498万人、女性823万。総人口の10.3%を占め、現行の統計方式が始まった1950(昭和25)年以来初めて1割を超えた。

○65~74歳で働く人の割合(07年)は32.2%。地方での農業と製造業

前回調査時の02年より1.1ポイント上昇した。都道府県別で見ると、長野が43.7%と最も高く、次いで福井40.1%、山梨39.9%、静岡、石川37.7%が上位を占めた。農業や製造業に従事する人の割合が高かった。

○65歳以上「高齢無職世帯」家計手取り収入は16万3023円、支出は20万3567円

世帯主が65歳以上で無職の「高齢無職世帯」の1カ月あたりの家計の支出額(07年)は20万3567円だったのに対し、年金などから税金などを引いた手取り収入は16万3023円で、赤字額は4万544円。前年より5276円、赤字が増えた。支出額は前年比2329円の増だった。原油高や食料品の高騰などで、支出がかさんだとみられる。

(3) 高齢のいる世帯は全世帯の38.5%。家族で支えあえるのか。

*以下、(3)~(5)は「厚生白書」(平成18年)「国民生活基礎調査」(平成17年)など厚生労働省各種資料から

○高齢者のいる世帯は全体の4割、そのうち「単独」「夫婦のみ」で過半数

- ・65歳以上の高齢者のいる世帯についてみると、平成18(2006)年現在、世帯数は1,829万世帯であり、全世帯(4,753万世帯)の38.5%を占めている。
- ・世帯の内訳は、「単独世帯」が410万世帯(22.4%)、「夫婦のみの世帯」が540万世帯(29.5%)、「親と未婚の子のみの世帯」が294万世帯(16.1%)、「三世代世帯」が375万世帯(20.5%)となっている。高齢者のいる世帯に占める単独世帯や夫婦のみ世帯は、増加傾向が続いている。

○子どもとの同居は減少しているが、子どもは依然として心の支え

- ・高齢者の心の支えとなっている人についてみると、平成 17(2005)年度においても、子どもを挙げる人が過半数を超えており、依然として高齢者にとって子どもが心の支えとなっている。
- ・子どもや孫との付き合い方について、60歳以上の高齢者の意識をみると、子どもや孫とは、「いつも一緒に生活できるのがよい」の割合が低下するなど、以前に比べると、より密度の薄い付き合い方でもよいと考える高齢者が増えている。

○高齢者世帯間の所得格差は大きいですが、社会保障給付などの再分配により改善

- ・高齢者世帯(65歳以上の者のみで構成するか、又はこれに18歳未満の未婚の者が加わった世帯)の年間所得(平成 17(2005)年の平均所得)は 301.9 万円となっており、全世帯平均(563.8 万円)の半分強。
- ・世帯人員一人当たりで見ると、高齢者世帯の平均世帯人員が少ないことから、189.0 万円となり、全世帯平均(205.9 万円)との間に大きな差はみられなくなる。

▼高齢者世帯の総所得は、年間302万円

—高齢者世帯の所得(平成18年;「国民生活基礎調査」—

| 区分 | 平均所得金額 | | | |
|-------|--------------|----------|---------|-------------------|
| | 一世帯当たり | | | 世帯人員一人当たり(平均世帯人員) |
| 高齢者世帯 | 総所得 | 301.9 万円 | | 189.0 万円(1.60 人) |
| | 稼働所得 | 54.5 万円 | (18.0%) | |
| | 公的年金・恩給 | 211.9 万円 | (70.2%) | |
| | 財産所得 | 15.7 万円 | (5.2%) | |
| | 年金以外の社会保障給付金 | 2.5 万円 | (0.8%) | |
| | 仕送り・その他の所得 | 17.2 万円 | (5.7%) | |
| 全世帯 | 総所得 | 563.8 万円 | | 205.9 万円(2.74 人) |

資料:厚生労働省「国民生活基礎調査」(平成 18 年)(同調査における平成 17 年 1 年間の所得)

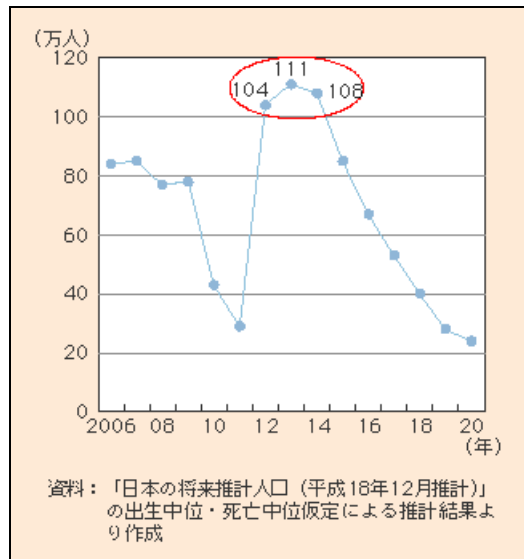
○高齢者の世帯の貯蓄は全世帯の約1.4倍であるが、300万円未満の世帯も約1割

- ・世帯主の年齢が 65 歳以上の世帯(二人以上の世帯)の貯蓄の状況についてみると、平成 18(2006)年において、一世帯平均の貯蓄現在高は、2,429 万円となっており、全世帯(1,772 万円)の約 1.4 倍となっている。
- ・貯蓄現在高階級別の世帯分布をみると、世帯主の年齢が 65 歳以上の世帯では、4,000 万円以上の貯蓄を有する世帯が 19.0%と全体の2割弱を占め、全世帯(11.3%)の 1.7 倍近い水準となっている。しかし、一方で、貯蓄の少ない者の割合は全世帯に比べて低いものの、貯蓄額 300 万円未満の世帯の割合は約 1 割となっている。

(4)「団塊の世代」が高齢期に達すると毎年 100 万人ずつ高齢者が増加

- ・「団塊の世代」といわれる昭和 22(1947)～24(1949)年に生まれた者は、出生数で約 806 万人、平成 17 年 10 月現在の人口で約 678 万人、総人口に占める割合は約 5.3%という人口構造上、大規模な集団である。
- ・国立社会保障・人口問題研究所の「日本の将来推計人口」(平成 18 年 12 月推計)によれば、「団塊の世代」が 65 歳に到達する 24(2012)～26(2014)年には、65 歳以上の高齢者が年に約 100 万人ずつ増加すると見込まれている。

▼「団塊の世代」が高齢期に達する時期に推計される高齢者の増加数



(5) 高齢化の推移と見通し

今後更に高齢者数と高齢化率は増加し、2020 年には 65 歳以上人口は 3,334 万人、高齢化率は 26.9%になると予想され、今後 20 年間の高齢者数の増加は現在の東京都人口にも匹敵する規模である。まさに、これから「高齢者の世紀」が始まる。

この「高齢者の世紀」を、前向きにとらえ、生まれた子どもの半数が 80 歳以上の長寿を享受できる社会の達成でもあり、国民生活の向上と社会保障の充実の成果でもあるという見方もあるが…。

3. データから見る「高齢社会」の問題点

1) 政府・民間の無策が講じて、自立と自己責任を求められる高齢者たち

①昭和 40(1965)年の国勢調査で、高齢化比率が 7%を超え高齢社会化への一歩がはじまったが、日本の経済の高度成長の真っ只中にあり、政府・民間ともに、高齢化社会への危機感は薄かった。本格的に政府が動き出すのは、バブル経済が崩壊し平成不況が長期化する中で行われた平成 7(1995)年の国勢調査において、高齢化率 14.5%という衝撃的な数字を前に、「高齢社会」の現実を目の当たりにする。

②そこで政府は、平成8(1996)年7月5日に「高齢社会対策の大綱について」閣議決定し、「高齢社会対策基本法」が成立する。この年から毎年政府は年次報告書として「高齢社会白書」を国会に提出するようになった。また、平成 9 年、平成 11 年の厚生白書で高齢化の課題を取り上げるようになり、遅ればせながら高齢社会対策に乗り出した。

*「高齢社会白書(第一回)」平成 8 年度
いまや我が国の 65 歳以上の高齢者は 1,902 万人、総人口の
15.1%を占める。私たちは、既に高齢社会に暮らしている

③しかし突然のごとくやってきた日本の高齢社会ではあるが、日本の経済はバブル経済崩壊後、失われた 10 年とも言われる長期の平成不況に見舞われ、「高齢社会」は国民の上に重くかぶさった。当時の意識調査での高齢社会評価は極めて暗く、陰湿でもある。

▼高齢化への評価(%) 困ったことだ、非常に困ったことが 5 割を超える

| | 非常によいことだ | よいことだ | どちらともいえない | 困ったことだ | 非常に困ったことだ | 不詳・無回答 |
|-----------|----------|-------|-----------|--------|-----------|--------|
| 平成2年(90年) | 1.2 | 3.0 | 36.0 | 39.5 | 12.0 | 8.3 |
| 平成7年(95年) | 0.8 | 2.2 | 33.9 | 42.6 | 14.7 | 5.9 |

資料：厚生省国立社会保障・人口問題研究所「人口問題に関する意識調査」(平成2年、7年)

④その後、平成不況が長引き国家財政も悪化するが、それに反比例するかのように高齢化率は年々上昇し続けた。一方で、数年後に戦後生まれの人口規模の大きい団塊の世代(1947(昭和 22)～1949(昭和 24)年生)が高齢期を迎え本格的な高齢社会に移行するという危機意識が生まれ、政府は再び、平成 13 年 12 月 28 日に前の大綱を破棄し、新たな総合的な高齢社会対策の大綱を定めた。そこでは、高齢化社会の「厳しい現実を見つめる」こと、「高齢者の自立と責任」が大テーマとなった。

2) 高齢者とは 70 歳以上の老人

何歳からが「老人」だと思いますかという質問に対して、多くの回答者は自分の現在の年齢よりも高い年齢を「老人」とであると回答する。つまり 70 歳の人は、75 歳や 80 歳からが「老人」とであると回答し、75 歳の方は 80 歳や 85 歳からが「老人」とであると回答するといった調査があったが、日本における高齢者の呼び方には、その時代の社会状況によって変化してきている。高齢者の呼び方こそが、その時代の社会状況を象徴するが……。

① 高齢者が「老年」と言われた時代

日本の国勢調査においては、昭和 35(1960)年まで 60 歳以上を「老年人口」としてきたが、昭和 40(1965)年から、65 歳以上を「老年人口」としている。さらに、女性の平均寿命が 80 歳を超えた昭和 60(1985)年頃から、75 歳以上を後期高齢者という統計が官庁の白書に登場し始め、平成 11 年(1998年)発行の第 5 版から後期高齢者という呼び方が広辞苑に収載されている。

② 高齢者が前期、後期)に分けられた時代

その後、一般的に、65 歳以上人口を「高齢者人口」とし、平成 14 年 10 月 1 日から老人保健医療対象者の年齢が 70 歳以上から 75 歳以上に引き上げられ、65 歳以上 75 歳未満を「前期高齢者(ヤング・オールド)」、75 歳以上を「後期高齢者(オールド・オールド)」として区分するようになった。

③ 後期高齢者が切り放された時代

そして、平成 20 年 4 月から、さらなる少子高齢化が進むとともに、国の財政が悪化し見通しもつかない中で、上記の保険負担や保険制度を変えるといった新しい高齢者医療制度が始まり、高齢者でも前期高齢者と後期高齢者とを制度的にもはっきりと区別し、75 歳以上を後期高齢者として切り離す形で区分するようになった。しかし、75 歳以上を対象とする「後期高齢者医療制度」という名称への反発(「失礼だ」「温かみがない」)が大きく、政府は制度実施初日に「長寿医療制度」という通称を急ぎよ決める異例の事態になった。

*もともと、後期高齢者は、75歳で高齢者を区分する老年学の学術用語だ。65～74歳をヤング・オールド、75歳以上をオールド・オールドと二分していたのを、それぞれ、前期高齢者、後期高齢者と訳したわけで、個人差はあるが、75歳になると複数の病気にかかる割合が高くなり、自立した生活が難しくなる。研究対象とする際も、社会政策上も都合が良く、先進国ではこの二分法が定着している。

④ 高齢者は 70 歳以上から

高齢者人口をみるときの年齢区分は、固定的なものではなく、人口や社会経済状況によっても変わってくる。

聖路加国際病院の日野原重明理事長は、75 歳以上を「新老人」と呼んでいるが、約 15 年前の内閣官房で「高齢者の生活イメージに関する調査」が行われ、65 歳以上を老人とみなす人は 3 割を下回っている。70 歳以上という人は 57% で 5 割を超えている。WHO の定義する 65 歳から高齢者という呼び方自体、日本では 10 数年前からあいまいになっている。

Ⅱ－日本社会における老人・高齢者のイメージ

1. 老人イメージの変遷

1) 古代から近代にかけては「古老」や「長老」

高齢者は古くより、社会的にも様々な経験や知識によって、一定の地位を獲得しているが、特に古代から近代に掛けては、医療技術が発展していなかった事もあり、高齢になるほど希少な存在となったため、長らくは「古老」や「長老」と呼ばれる、高齢者に対する特別な尊称が存在する。

近代に於ける社会では、高齢者は豊富な知識と経験で民間療法にも通じ、呪術医などと同列の存在となっていた。このため高齢者に対する一定の畏敬の念が存在し、高齢者に関連する物品までもが、何等かの霊的な効能を持つと考えられていた。これらは後に高齢者が人の生命(健康)をも左右するという考えに発展、更には魔法使い等のイメージの原型となったとされる。

2) 痴呆、寝たきり、シルバー、虐待など(高年齢化率が高まるにつけ悪化した老人イメージ)

高齢者比率が7.1%(昭和40年)、10.3%(昭和60年)、17.3%(平成12年)へと高まっていったが、その30年間で日本の社会は高度経済成長から低成長もしくはゼロ成長にまで落ち込み将来への不安が蔓延する社会になった。その中で、少しずつ高齢者に対する恨み、妬み、嫌悪(時間とお金に余裕があり、また、痴呆、寝たきりなどから高齢者に対する蔑視、高齢者虐待が増え老人イメージは悪化し続けた。

3) シニア、エルダリー、プラチナ、新老人(やさしく高齢者を見守る社会に)

一方で、高齢化社会から高齢社会(高齢化率17%超え)に日本の人口構造が変化する中、「年をとった、年寄り、高齢の」といった年齢を強調した表現を避け、「より経験豊かな、前任の」といった価値中立な表現を工夫して用いるような傾向がでてきている。たとえば、oldではなく、senior、elderly、agedなど。日本語においては、同義語として老人、年寄(お年寄り)などの言葉がある。またこの世代を老年と称する場合がある。

4) 老人の祝い歳 (全て『数え年の年齢』。ただし、現在は満年齢で祝う場合も多い)

| | | | |
|-----|----------|------|-----------|
| 61歳 | 還暦(かんれき) | 99歳 | 白寿(はくじゅ) |
| 70歳 | 古希(こき) | 100歳 | 百寿(ひゃくじゅ) |
| 77歳 | 喜寿(きじゅ) | 108歳 | 茶寿(ちゃじゅ) |
| 80歳 | 傘寿(さんじゅ) | 111歳 | 皇寿、川寿 |
| 88歳 | 米寿(べいじゅ) | 120歳 | 大還暦、昔寿 |
| 90歳 | 卒寿(そつじゅ) | | |

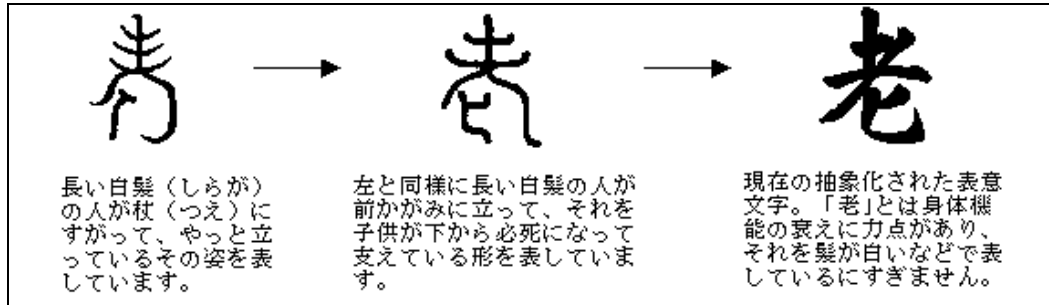
「敬老の日」は老人の知恵を借りて村づくりをすることからはじまった

戦後間もなくの1947年(昭和22年)に兵庫県多可郡野間谷村で「老人を大切に、年寄りの知恵を借りて村作りをしよう」ということで「としよりの日」が提唱され農閑期に当たり気候も良い9月中旬の15日に「敬老会」が開かれた。これが1950年(昭和25年)頃から全国に広まった。その後「としより」という表現は良くないということで1964年(昭和39年)に「老人の日」と改称され、1966年(昭和41年)には国民の祝日に関する法律で「建国の日(2月11日)」とともに「敬老の日」が国民の祝日になった。「元正天皇が養老の滝に御幸した日」である等の俗説もあるが、「母の日」のように外国から輸入されたような記念日と違い、日本以外の諸外国にはない。敬老の日は元々は9月15日だったが、2001年の祝日法改正(ハッピーマンデー制度の適用)によって、2003年からは9月第3月曜日になった。

2. 「老」という文字の成り立ちとイメージ

1) 「老」文字の歴史的変遷

「老」という漢字は、年寄りが腰を曲げてツエをついている象形文字が字源。対義語の「若」の字は、髪をとく女性の姿態からきているという。(語源・字源)



2) 「老」という文字が醸し出すイメージ

老人、老齡、老骨、老眼、老朽、老軀、老醜、老親、老衰、老木、老涙などなど「老」と言う文字が入った漢字は妙に気味が悪い。しかし、「老」がつく漢字には、年をとった人は「老人」「老婆」「老爺」と言うが一方で、年をとって物事をよく知っている人を、例えば、水戸黄門ではないが「老公」と呼んだり、「老翁」「老大家」「長老」「元老」など敬語的に扱われる漢字もある。

▼「老が付く漢字は、なかなか味わいがあるものも多い。」

| | |
|----|----------------------------------|
| 老鶯 | あるが過ぎても鳴くウグイスの意の漢語的表現 |
| 老獯 | 経験を積んで悪賢いこと・様子 |
| 老朽 | 古くなって使いものにならないこと・人 老朽化 |
| 老境 | 悟りきって淡々とした)人の境地 |
| 老巧 | 経験が豊富であらゆる点に配慮が行き届いていること |
| 老師 | 年をとった先生・坊さん |
| 老实 | 物事に慣れていて忠実な様子 |
| 老練 | その道での経験を積み、どんな難しい事でも巧みに処理してのける様子 |
| 老舗 | 歴史のあるお店、企業 |

資料:「国語辞典」(旺文社)他

3) 老人語 (ろうじんご)

- ・一人称で「わし」や語尾「～じゃ」、打消し「～ぬ」など、老人の使う言葉
- ・これらの言葉は現代の広島弁に近いが、広島弁が直接的に老人語とされたわけではない。
- ・江戸時代もそうだが、「物知りと云われる人」は年配者であり、また当時の文化の中心は近畿地方であったことから、「老人」と「西日本出身」のイメージが結びつき、それらの人の言葉が定着したのではないかと云う。
- ・明治時代になってから、「維新の元勳」や政治家、軍人に長州出身者が多かったことも影響しているとされる。

・青少年が日常的に使うことはほとんどないが、高齢者が使う古語、廃語になっていない言葉でもある。誰でも、高齢者になる可能性があるので、老人語を特定することはできない。第二次世界大戦前までに使用されていた言葉が多い。

・新明解国語辞典における言葉の種類のカテゴリー(女性語、学生語など)のひとつである。

▼老人語の一覧(一部)。第二次大戦前までよく使われていた言葉でもある

| 言葉 | 意味 | 言葉 | 意味 |
|------|------------------------------|------|------------------------------|
| 半ドン | (午前中に業務・授業が終了し午後が休みの早期終業のこと) | 満艦飾 | (物干しにぶら下がった洗濯物) |
| ロートル | (老人・年配者・グループの年長者/中国語) | 汽車 | (列車線で運行される電車・気動車、もしくはJR線の通称) |
| ノークラ | (オートマチックトランスミッションの車の事) | 上等舶来 | (舶来品)(持ち物・服装・良好な状況等を褒める語) |
| シャボン | (石鹸) | ポンユウ | (朋友/中国語) |
| 国電 | (「国鉄電車」の略称) | メリヤス | (ニット製品) |
| 帳面 | (ノート) | ピロード | (ベルベットの布) |
| 大蔵省 | (家計の管理担当者) | 衣紋掛け | (ハンガー) |
| 連絡船 | (比較的に大型のフェリーボート) | バンド | (ベルト) |
| 高等文官 | (キャリア公務員) | アポロ | (矢羽式方向指示器) |

* その他「インターホンやチャイムを音で呼ぶ(“ピンポンが鳴る”など)」

資料:新明解国語辞典(三省堂)

4) 老人に関する格言

| | | |
|----------------------------------------------|----------|---------------------|
| ・老人とは、子供を二つ合わせたようなものだ | 「ハムレット」 | シェイクスピア(英・劇作家) |
| ・みずから老人たることを知るものは少ない | 「箴言集」 | ラ・ロシュフコー(仏・箴言作家) |
| ・老人が落ち込むその病気は貪欲である | 「わめく女」 | ジョン・ミルトン(英・詩人) |
| ・混濁と錯乱と銜気にみちていて、老人は想像の幻影を持っている | 「死にいたる病」 | キェルケゴール(デンマークの哲学者) |
| ・老人になって堪えがたいのは、肉体や精神の衰えではなくて、記憶の重さに堪えかねるとである | 「人間の絆」 | サマセット・モーム(英・作家・演劇家) |
| ・老人の忠告は光を与えるが温めない、冬の太陽のように。 | 「省察と格言」 | ヴォーヴナルグ(仏・モラリスト) |
| ・青年は老人を阿呆だと思うが、老人も青年を阿呆だと思う | 「すべての阿呆」 | チャップマン(米・詩人) |
| ・老いたる馬は道を忘れず | 「源平盛衰記」 | |
| ・老いたるを父とせよ | 「礼記」 | |
| ・老いの幸い | 「吾吟我集」 | |

資料:「ことわざ辞典」(集英社)他

Ⅲ－いま(今)どきの高齢者たち 新しい老人神話の誕生

1. かつての「老人神話」は消え、新たな21世紀の「新たな神話」が生まれる

2035年には、全人口の30%以上が65歳以上の人で占められる(ほぼ確実な推計値)。少子化をともなう65歳以上の老人人口の急増が、近い将来の日本に大きな問題を投げかけることは言を俟たないが、高齢者の存在が社会問題化すると真剣に取り組み始めたのは、高齢化社会に入ったといわれる昭和40(1965)年頃から遅れて30年後の平成7(1995)年である。

翌年、平成9年版厚生白書で「問い直される高齢者像」というテーマで、日本にはびこる定型化されてしまった印象がある高齢者像は間違っているとことが「老人神話の崩壊」として検証された。

しかし、かつての老人神話は崩壊したといって間違いないことは明らかだが、21世紀に入り、高齢社会が本格化した今日、人生80～100年という長寿社会の下、新たな老人神話が生まれつつある。

▼かつての「老人神話」の崩壊・検証結果—平成9(1997)年版厚生白書—

| | 神話 | 検証の結果 |
|-------|-----------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 神話その1 | 老化しているかどうかは、年齢で決まる。 | ・身体・精神・情緒の面において老化の状態は個人差が非常に大きく、それを年齢によって一律に扱うことは適切ではない。 ・高齢者を年齢によって画一的にとらえず、身体・精神的に非常に幅のある存在として考えることが重要である。 |
| 神話その2 | 高齢者のほとんどは、健康を害している。 | ・健康面の意識調査では、65歳以上の人で「(健康が)あまりよくない」「よくない」と答えているのは約2割であり、大多数の高齢者は健康であると考えている。 |
| 神話その3 | 高齢者は、非生産的である。 | ・我が国の場合には、高齢者の就業率が他国と比べても特に高く、70歳後半でも30%程度に上っている。したがって、高齢者が生産的な活動に参加していないとする見方は誤りである。 |
| 神話その4 | 高齢者の頭脳は、若者のように明敏ではない。 | ・結晶性知能(言語や社会的知識に代表されるもので、学習経験の影響を相対的に受けやすいとされる知能)は、高齢期になっても比較的遅くまで維持される。 |
| 神話その5 | 高齢者は、恋愛や性に無縁である。 | ・異性との間の愛情や性的関係を望む人は男性の94%、女性の70%にのぼるという結果が得られている。高齢者は恋愛や性と無縁であるという考えが誤りである |
| 神話その6 | 高齢者は、誰も同じようなものである。 | ・健康な人から病弱な人、積極的に社会活動に参加する人から全く関心を示さない人、そして、高齢社会に明るい印象を持つ人から暗い印象を持つ人までさまざまな人がいる。高齢者に対する先入観の多くは、こうした多様性を無視して、高齢者を否定的な捉え方で一括りにしてしまおうとするものである。 |

2. いまどきの高齢者—新・老人神話—

高齢者人口の増大に伴って、一人暮らしの高齢者が増え、また、高齢者の犯罪、高齢者の自殺、高齢者の結婚などが急激に増えはじめている。

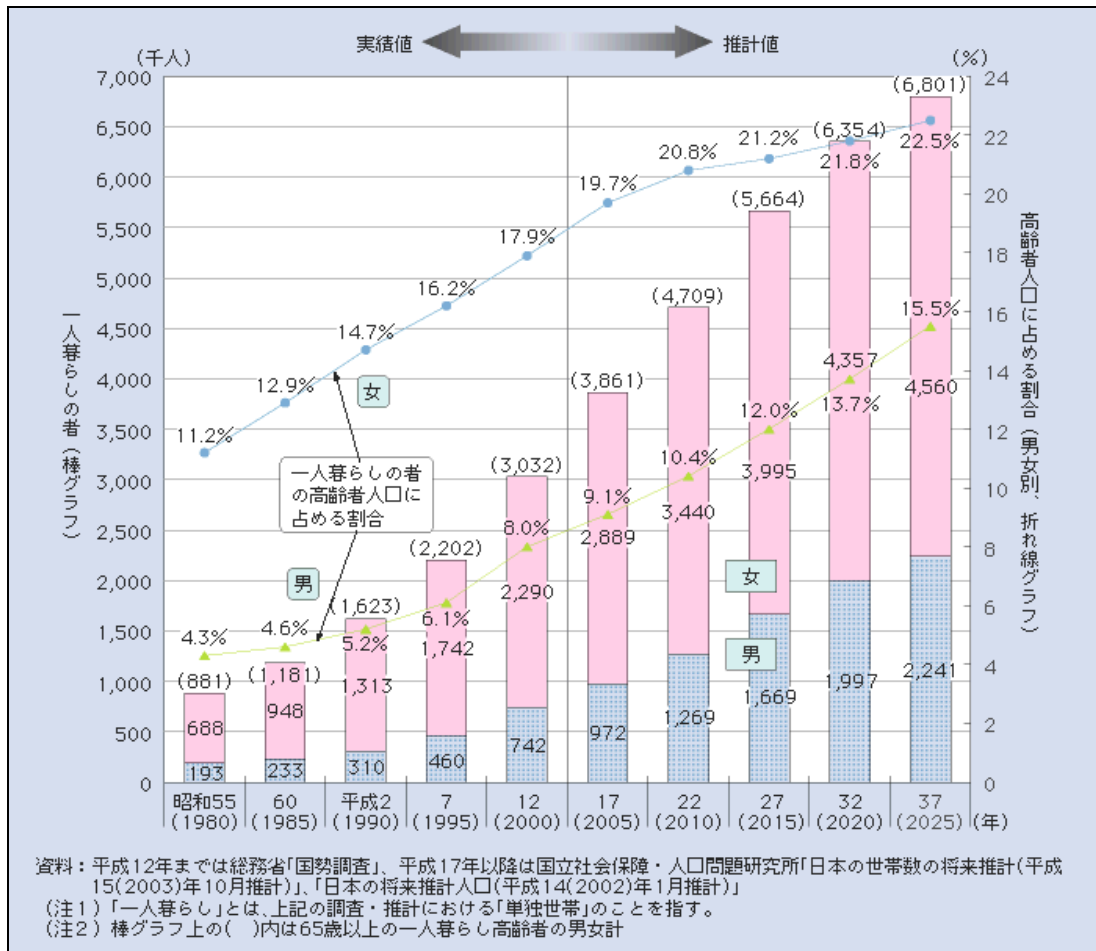
また、今までとは異なる老人の行動や老人に対する再評価も出てきた。

新老人神話・1 家族は離散。女性を中心に一人暮らし高齢者世帯が多くなる。

65歳以上の者のいる世帯数は、平成15(2003)年現在1,727万世帯であり、全世帯(4,580万世帯)の37.7%を占めている。内訳は、「単独世帯」が341万世帯(19.7%)、「夫婦のみの世帯」が485万世帯(28.1%)、「親と未婚の子のみの世帯」が273万世帯(15.8%)、「三世帯世帯」が417万世帯(24.1%)となっている。

「65歳以上の高齢者人口に占める一人暮らし高齢者」の割合は、昭和55(1980)年には男性4.3%、女性11.2%であったが、平成12(2000)年には男性8.0%、女性17.9%と顕著に増加している。今後も一人暮らし高齢者は増加を続け、特に男性の一人暮らし高齢者の割合が大きく伸びることが見込まれている。

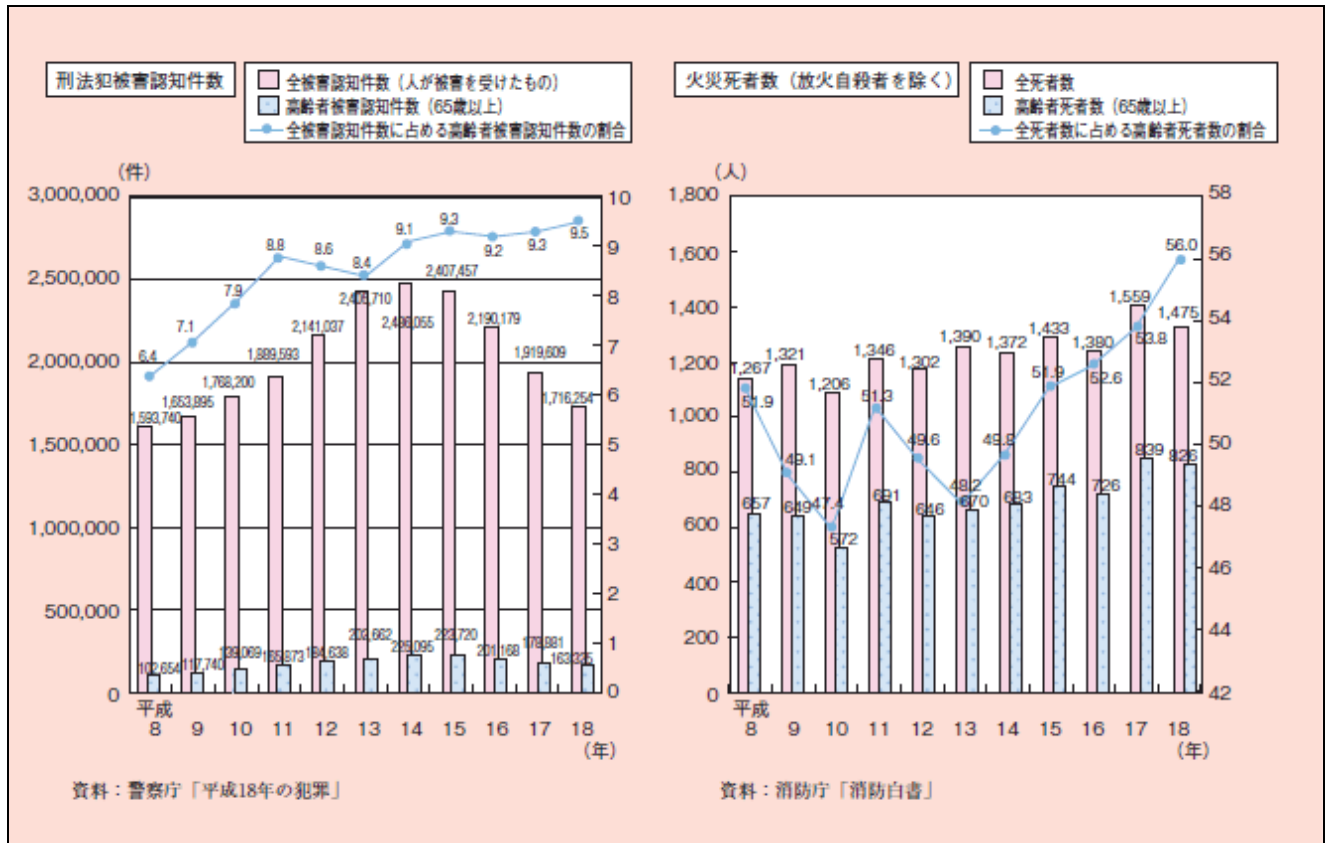
▼一人暮らしの高齢者の動向



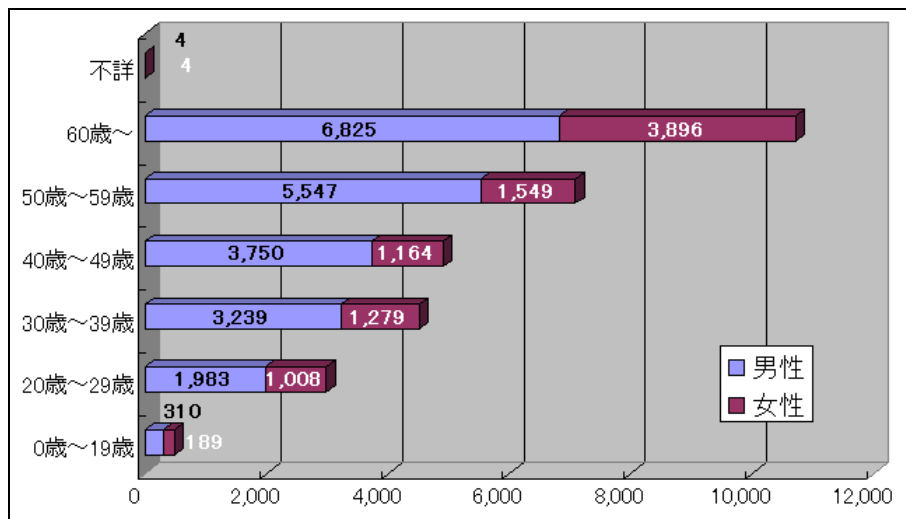
新老人神話・2 老人は常に危険(犯罪・火災・自殺)にさらされる

- ・65歳以上の高齢者の火災による死者数(放火自殺者を除く)についてみると、平成18(2006)年は826人であり、全死者数の56.0%を占めている。
- ・全国の消費生活センターに寄せられた契約当事者が70歳以上の相談件数は、平成12(2000)年度は43,336件であったのが年々増加し、18(2006)年度は134,735件で、相談全体の12%を占めている。

—犯罪、火災による高齢者の被害の推移—



—男女別・年齢別自殺者数(平成19年中)—



新老人神話・3 老人はキレやすくなる。「暴走老人」。

高齢者の検挙刑事事件が急増している。

日本では過去 10 年で 65 歳以上の高齢者人口は 1.3 倍へと増加したが、高齢者による犯罪はそれを上回る 3.5 倍にも増加している。警視庁によると、昨年日本全体で検挙された刑事事件の容疑者 33 万 8600 人のうち、高齢者は 4 万 5000 人にも達したという。数字だけを見れば 10 年前に比べて 3.5 倍、全体の容疑者に占める割合は 10 年前の 4%から 13%へと急激に増加した。

高齢者による犯罪のおよそ半分を占めるのが、店で品物を万引きする窃盗だが、それ以外にここ 10 年で急激に増加した犯罪が暴行だった。暴行で検挙された高齢者は 17 倍にも増えており、増加のペースだけを見ると傷害の 4 倍や窃盗の 3 倍を上回っている。北海道で窃盗容疑により警察に検挙された高齢者を対象に行ったアンケート調査によると、犯罪理由の第 1 位として挙げられていたのが「孤独」で 27.8%を占めていたようだ。

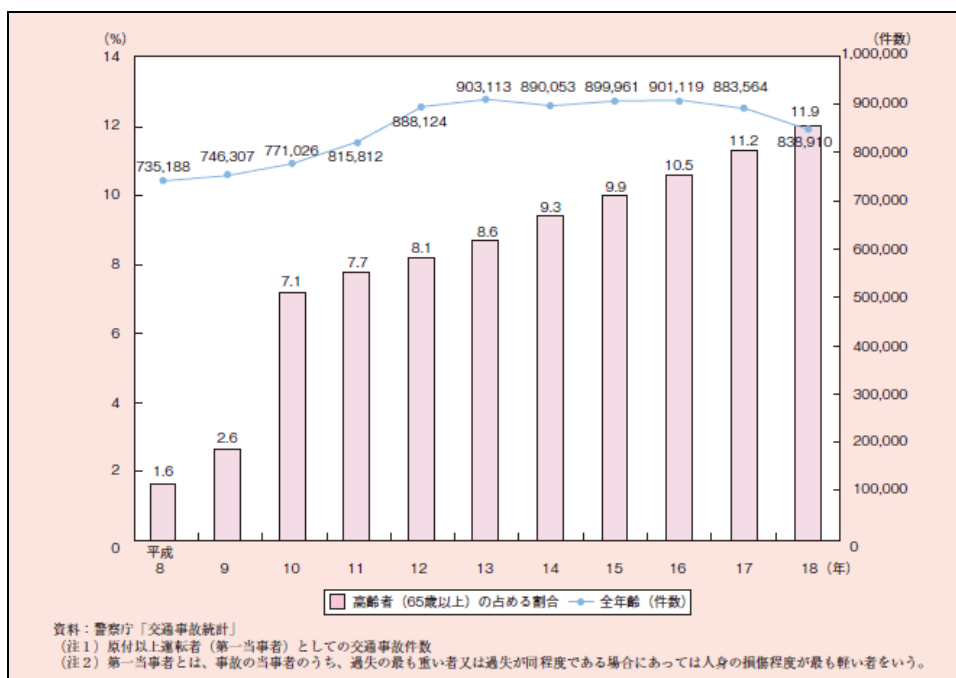
「あんた失礼じゃないかッ！」たいした理由もなく公共の窓口で突然キレル中年、店のカウンターでいつまでも怒鳴り続ける男、病院での待ち時間にキレて看護婦を殴る年寄り……。

新老人神話・4 老人ドライバーは車でも暴走する。「一姫、二若、三老人」。

1960 年代、「一富士二鷹三茄子」という諺をもじり、危ないドライバーのタイプを示した言葉で「一姫二虎三ダンプ」という言葉が流行った。「一姫二若三老人」はその平成版として出来た言葉で、1 番危険なのは女性ドライバー、次に若いドライバー、老人ドライバーが危険であることを意味する。

平成 18(2006)年の全国の交通事故件数に占める高齢者(65 歳以上)の割合は 11.9%である。また、交通事故による死者の内、高齢の運転者による死亡事故も増加している。死者の年齢別では、65 歳以上の高齢者が全体の 41.5%を占め、漫然とした運転や不適切な運転操作が原因のケースが約三割を占めた。 ▼最近 10 年間で高齢者の交通事故件数に占める比率は急上昇

—高齢者による交通事故件数の推移(各年12月末)—



新老人神話 5 老人が都市ジャック。都会に「限界集落」を出現させる高齢者たち。

- ・限界集落とは、「65 歳以上の高齢者が半数超」のほか、小規模集落の場合は「働き盛りの壮年人口が 4 人未満」と定義される。過疎化がさらに進めば最終的に無人化して消滅に至る。そんな限界集落が東京新宿の団地(建替え)に出現し、「都心の姥捨山」か?などと揶揄されている。高齢化に加え建て替えて高齢者が集中したことが原因。
- ・日本の高度経済成長と足並みを揃え、大都市近郊の住民に「わが家」を提供してきた団地が高齢化の波に飲まれ、都市の公営住宅に高齢者が集中する傾向は各地で見られる。都市部の高齢化は、国立社会保障・人口問題研究所が2006年末にまとめた推計によると、2005年と比べた2035年の老年人口(65歳以上)の増加率は、東京、埼玉、神奈川、千葉の4都県とも60%を超えている。
- ・国立社会保障・人口問題研究所は団塊の世代が多い都市部の都道府県で高齢化が進むとみており、「限界集落」が地域の中心都市に現れる可能性もあり、新たな都市問題となりそうだ。高齢者は大都市に新たな都市問題を作り出した。老人パワーここにありということだ。

新老人神話・6 新・老人の活躍が、随所で見られるようになる。

●「杖と権力」を好む老人は増える。

現代に於いても、権力の象徴として杖(笏・司教杖など)が利用されるが、これは高齢者が獲得した威厳の代用品である。また西欧においてはこれが司祭等の宗教的権力の象徴となり、これを国王が持つ事で、宗教的な権力をも王が持つ事を表した。100 歳まで生き続けることができる社会には「杖と権力」が必要だ。

●武術の達人。

伝統武術の分野では、後世に様々な技術(戦闘技能だけでなく、医療なども含む)を伝えるべく、指導的立場に立つ高齢者は多い。「老師」などと呼ばれる存在である。ただし、中国武術では「皆伝者」と同等の意味合いを持つ言葉でもあるため、老師は必ず老人であるとは限らない。このため高齢者である武術の達人は、身体的な衰えがあったとしても、基本の出来ていない若者と比較して、圧倒的な強さを発揮する。しかし、基本の修練により練磨された身体能力は、簡単には衰えない筋力を使用している事が多い為、必ずしも筋力で劣っている訳ではない。練磨された技能と錬成された筋力の両方の力によって、本当に「異常な能力」をもつ者は多い。

●科学・技術に強い老人。

近代において、多量の知識を必要とした科学者や技術者においては、老人は既に学会や企業の淘汰を生き残り、必要な助言を与える者として、尊敬され、かつ、老人は厚遇されてきた。しかし、近年、身体、精神を飛躍的に改良する遺伝子工学、あるいはコンピューターの発達により、若い科学者や技術者がすぐに過去知を記憶できるようになった。しかし、老人はその一族の学会内部や企業業界の権益を代表して鎮座する。このことは、これからの「知価社会」に生き残る重要なポイントとなる。

●老人は漫画やアニメの「名脇役」から「主役」として登場する。

架空の世界を扱った作品(漫画・アニメといった物から映画・小説に至るまで)等でも戦闘に長けた老人は多数登場して来ている。中でも武術を習得し、格闘戦等が得意で戦術の知識を長年培ってきた老人キャラクターも多々見られ、またメジャーとは言えないが老騎士もかなり戦闘力が高い形で描かれている。

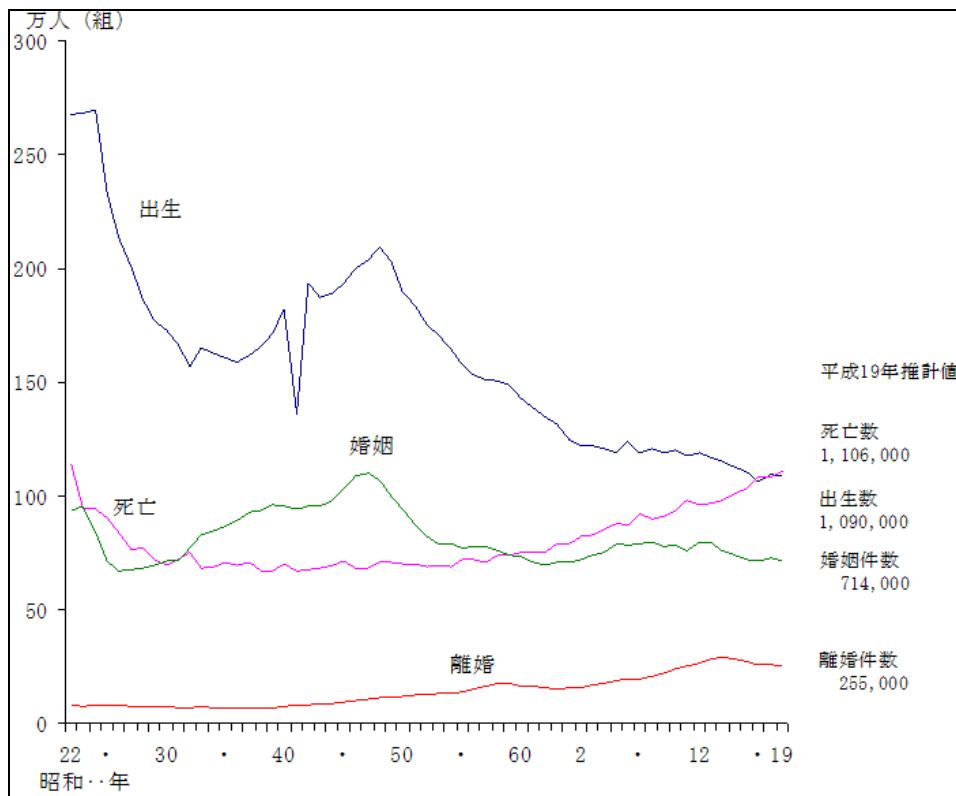
しかし漫画や小説のメディアでは、読み手が感情移入しづらいので、高齢者がこれら作品中で主役になることは殆ど無く、そのポジションは脇役になることが多かった。作品の途中で敵と戦った末に戦死したり、次の世代に意思を託して衰弱死するなど物語の中間地点で死んだりすることも少なくはなかったが、長寿社会においては脇役から主役に躍り出る可能性は高い。

新老人神話・7 日本の社会は、「多産少死」から「少産多死」の時代に大転換する。

1)人口増加のペースは、経済社会の発展に伴い、「多産多死」(高出生・高死亡)から「多産少死」(高出生・低死亡)を経て、やがて「少産少死」(低出生・低死亡)に至るといふ「人口転換理論」というのがあるが、20%に達した日本の高齢社会はどのようなプロセスを歩むのか？

日本では、明治維新以前が多産多死、明治から昭和30年代半ばまでが多産少死、昭和30年代半ば以降が少産少死の段階であると考えられている。「少産少死」の段階になると人口動態は安定するものと考えられていたが、最初に「少産少死」に達した欧米諸国では、人口置き換え水準よりも低くなる(第二の人口転換)という一層の出生率低下がみられる。

▼人口動態総覧の年次推移(人口動態調査・厚生労働省)



資料:人口動態統計(厚生労働省)

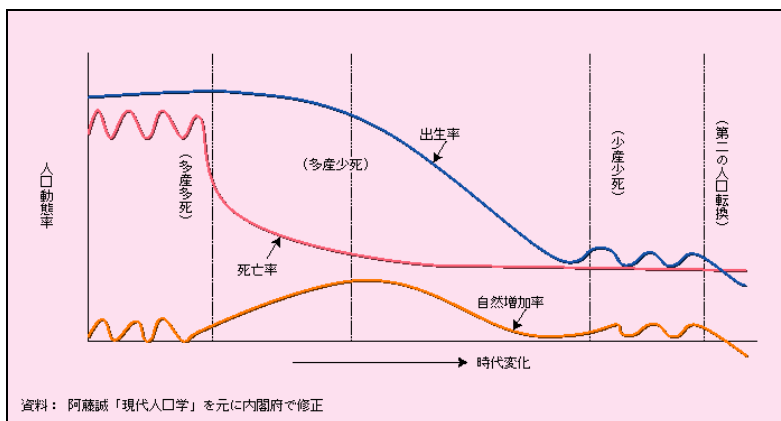
2)日本でも、結婚や家庭に対する個人や夫婦の価値観の変化があり出生率のさらなる低下といった「第二の人口転換」に至っている状況にあるが、一方で、団塊世代という特異な大きな人口規模の高齢化では新たな人口問題が浮上する。

それは、2020年には65歳以上人口は3,334万人、高齢化率は26.9%になると予想される高齢者人口の多さと日本人の平均寿命約80歳(日本の男性の平均寿命79.00歳、女性85.81歳/厚生労働

省・平成 18 年簡易生命表)との関係から予想される死亡者数の問題である。

日本の死亡者数は平成 15(2003)年に 100 万人の大台を超え、以降増加を続けており平成 19 年に 110 万人となり出生人口(109 万人)を上回り、日本が人口減少社会になったことが確認されている。

▼人口転換モデル



3) 日本の人口構造の変化は、日本の社会を、短期的(約 50 年程度)ではあるが「人口転換モデル」である第二の人口転換の中で、「少産多死」ではない「少産少死」への社会に導く。

日本の年齢別死亡率(10 万人あたりを死亡人口)の推移をみるとをみると、明らかに 65 歳以上人口の死亡率は、当然ではあるが日本全体の死亡率を大きく上回るが、高齢者層の死亡率は、最近横ばいが続いている。死亡率が一定であれば、その分母である高齢者数が増えれば、それだけ死亡者数は増えるのである。

▼増える高齢者の死亡数(人口動態調査／厚生労働省)

年齢(5 歳階級)別にみた死亡数・死亡率(人口 10 万対)

| 年齢階級 | 死亡数 | | | 死亡率 | | |
|---------|-----------|-----------|---------|----------|----------|-----------|
| | 平成 18 年 | 平成 17 年 | 対前年増減 | 平成 18 年 | 平成 17 年 | 対前年増減 |
| 1) 総数 | 1 084 488 | 1 083 796 | 692 | 859.7 | 858.8 | 0.9 |
| 0~4 歳 | 3 939 | 4 102 | △ 163 | 72.3 | 73.9 | △ 1.6 |
| 5~9 | 612 | 655 | △ 43 | 10.4 | 11.1 | △ 0.7 |
| 10~14 | 573 | 590 | △ 17 | 9.6 | 9.8 | △ 0.2 |
| 15~19 | 1 778 | 1 802 | △ 24 | 28.0 | 27.6 | 0.4 |
| 20~24 | 3 168 | 3 370 | △ 202 | 44.5 | 46.9 | △ 2.4 |
| 25~29 | 3 948 | 4 170 | △ 222 | 50.7 | 51.5 | △ 0.8 |
| 30~34 | 5 622 | 5 952 | △ 330 | 59.6 | 62.0 | △ 2.4 |
| 35~39 | 7 388 | 7 469 | △ 81 | 81.3 | 86.9 | △ 5.6 |
| 40~44 | 10 062 | 10 238 | △ 176 | 128.5 | 128.5 | 0.0 |
| 45~49 | 15 295 | 15 754 | △ 459 | 201.6 | 205.9 | △ 4.3 |
| 50~54 | 26 373 | 28 964 | △ 2 591 | 316.5 | 331.3 | △ 14.8 |
| 55~59 | 51 066 | 49 579 | 1 487 | 474.9 | 484.9 | △ 10.0 |
| 60~64 | 58 266 | 62 258 | △ 3 992 | 720.0 | 730.1 | △ 10.1 |
| 65~69 | 79 282 | 80 829 | △ 1 547 | 1 045.2 | 1 088.9 | △ 43.7 |
| 70~74 | 117 349 | 120 825 | △ 3 476 | 1 729.3 | 1 821.1 | △ 91.8 |
| 75~79 | 159 253 | 159 362 | △ 109 | 2 953.0 | 3 029.1 | △ 76.1 |
| 80~84 | 178 405 | 174 185 | 4 220 | 4 895.9 | 5 109.4 | △ 213.5 |
| 85~89 | 166 758 | 165 385 | 1 373 | 8 626.9 | 8 947.0 | △ 320.1 |
| 90~94 | 130 489 | 127 573 | 2 916 | 14 694.7 | 15 167.7 | △ 473.0 |
| 95~99 | 53 979 | 50 503 | 3 476 | 22 969.8 | 23 894.8 | △ 925.0 |
| 100 歳以上 | 10 340 | 9 578 | 762 | 35 655.2 | 37 771.1 | △ 2 115.9 |

注：1) 総数には年齢不詳を含む。

▼高齢者の死亡率(人口10万対)の年次推移(人口動態調査／厚生労働省)

昭和30年～平成7年の90～94歳は90歳以上の数値である。

| 年齢 | 昭和30年 | 40 | 50 | 60 | 平成7年 | 17 | 18 |
|--------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 総数 | 776.8 | 712.7 | 631.2 | 625.5 | 741.9 | 858.8 | 859.7 |
| 65～69 | 3 556.2 | 3 161.2 | 2 230.4 | 1 554.0 | 1 397.9 | 1 088.9 | 1 045.2 |
| 70～74 | 5 756.7 | 5 297.3 | 3 931.4 | 2 717.5 | 2 191.5 | 1 821.1 | 1 729.3 |
| 75～79 | 8 831.6 | 8 927.2 | 6 712.6 | 4 980.5 | 3 827.8 | 3 029.1 | 2 953.0 |
| 80～84 | 13 110.6 | 14 918.1 | 11 461.4 | 8 540.5 | 6 882.0 | 5 109.4 | 4 895.9 |
| 85～89 | 19 985.6 | 21 656.2 | 18 042.0 | 14 725.6 | 11 847.5 | 8 947.0 | 8 626.9 |
| 90～94 | 29 973.2 | 28 683.1 | 29 126.2 | 23 364.8 | 21 468.2 | 15 167.7 | 14 694.7 |
| 95～99 | … | … | … | … | … | 23 894.8 | 22 969.8 |
| 100歳以上 | … | … | … | … | … | 37 771.1 | 35 655.2 |

執筆者コメント

◆100歳以上の人口は、日本の自殺者とほぼ同じ数字であることにビックリ！

日本は高齢化社会をへて平成7年頃に高齢社会に入っていたが、日本の社会が本当に高齢社会なのかどうかよくわからないところがあった。しかし、今年の「敬老の日(15日)」に合わせ総務省が発表した「100歳以上人口」を確認してびっくり。100歳以上人口が3万6276人だという。これは、日本の昨年中の自殺者(3万3039人・年警察庁)の間違いなのではないかと、また90歳以上人口の115万人は、昨年の出生人口(109万人・厚生労働省)と死亡人口(111万人・同)にほぼ匹敵するのだ、と妙に感心したわけだが、日本の高齢社会の現実は大したものではないと強く認識させられた。

日本の社会では、法的・制度的にもまた消費市場において効率的に運営するために、生から死までを、幼児、子供、少年、青年、中年、前期・後期高齢者等々かなり細分化している。しかし、平成20年4月から新しい高齢者医療制度で後期高齢者を分離することで猛反発を受けたように、その細分化は機能不全に陥っている。また、高齢者のボリュームが人口の5分の1となる2800万人になった今日、高齢者や老人の定義を変えざるを得ないところまで来ている。

◆人口の高齢化は社会の高齢化だったことを忘れていた！

しかし、我々は数年前まで高齢者、いや老人についての問題を考えることを避けてきた。なぜなら、高齢化比率の高まりと反比例して日本の経済成長率は低下を続けており、社会を改革し活気づけることばかり考えてきたのである。老人神話の崩壊(平成9年)ということで高齢者弱者論を否定しながら、一方で、弱者でないのであれば高齢者に自立と自己責任を求めるなど、この10年間の高齢者対策は、極端に振れている。なぜか人口の高齢化よりも社会の高齢化を恐れたのである。

基本的な命題である「人口の高齢化とはすなわち社会の高齢化」ということを忘れるほどの景気停滞に巻き込まれていたのだ。

■ 高齢者比率と経済成長率は反比例 —経済成長と高齢化推移(5 年毎)—

| | 65 歳以上人口 | 同伸び率 | 高齢者比率 | 名目国民総生産 | 経済成長率 | |
|------|------------|------|-------|----------|-------|----------|
| | 人 | % | % | 名目;10 億円 | 名目;% | |
| 1960 | 5,397,980 | 12.8 | 5.7 | 16,010 | 91.3 | |
| 1965 | 6,235,614 | 15.5 | 6.3 | 32,966 | 105.9 | |
| 1970 | 7,393,292 | 18.6 | 7.1 | 73,345 | 122.5 | ← 高齢化社会へ |
| 1975 | 8,865,429 | 19.9 | 7.9 | 148,827 | 102.9 | |
| 1980 | 10,647,356 | 20.1 | 9.1 | 243,235 | 63.4 | |
| 1985 | 12,468,343 | 17.1 | 10.3 | 325,792 | 33.9 | |
| 1990 | 14,894,595 | 19.5 | 12.0 | 441,915 | 35.6 | |
| 1995 | 18,260,822 | 22.6 | 14.5 | 496,457 | 12.3 | ← 高齢社会へ |
| 2000 | 22,005,152 | 20.5 | 17.3 | 504,119 | 1.5 | |
| 2005 | 25,672,005 | 16.7 | 20.1 | 503,789 | -0.1 | |

資料:総務省「国勢調査」、財務経済省「経済統計」

最近の高齢者は、今までの高齢者と全く異なった状況に立っている。ある種の不能の状態が現れて初めて老人として社会的な介護を受けることになるけれども、それまでは徐々に楽な、しかし、労働を続けていくという形を望み・実行している。

「金」持ちもいれば「時」持ちもいる。「病氣」持ちもいる。「芸」を持つひと「技術」を持つ人もいる。老人は何かを持っているからこそ老人なのだ。

これからの老人は、今後の日本の社会に良くも悪しくも「新たな神話」を作りだしてゆくに違いない。いまだかつてない高齢人口が今ここに存在しているからだ。

◆ 人生 100 年で第三の人生の後には第四の人生が…。「少産多死」の社会がやってくる！

日本の社会は、「少産多死」から「少産少死」へと移行してきたが、今後は、さらに高齢者が増える。そこでは、人口状況の構造的な変化までには至らないだろうが、表面的には日本の人口状況は「少産多死」の時代を迎える。

人生 100 年の現代社会となった今、今一度「人の生涯」について考え直す時がきた。

古代のインドでは生涯を四つの時期に分けて考えていたという

- ・学生期 0～25 歳 よく学び、体を鍛える
- ・家住期 25～50 歳 仕事に励み、家庭を維持する
- ・林住期 50～75 歳 仕事を離れ、真の生き甲斐をさがす
- ・遊行期 75～100 歳 自らの死に方について考える

「林住期」(五木寛之、幻冬舎文庫)という本が話題になり、輝かしい第三の人生への関心が強まっているが、次には第四の人生が必ず待っている。

長期スパンで人生を考える余裕のある社会はいつやってくるのだろうか。

(記・立澤)

参考：日本の年齢(5歳階級)別男女別人口 及び 25年前対比— 全国/平成17年国勢調査—

| 年齢 (5歳階級) | 人口数 | | | | | |
|--------------|---------------|-----------------|---------------|-----------------|---------------|-----------------|
| | 総数 | | 男 | | 女 | |
| | 平成17年 2005 | 昭和55年 1980=1 | 平成17年 2005 | 昭和55年 1980=1 | 平成17年 2005 | 昭和55年 1980=1 |
| 総数 | 127,767,994 | 1.09 | 62,348,977 | 1.08 | 65,419,017 | 1.10 |
| 0～4歳 | 5,578,087 | 0.66 | 2,854,502 | 0.65 | 2,723,585 | 0.66 |
| 5～9 | 5,928,495 | 0.59 | 3,036,503 | 0.59 | 2,891,992 | 0.59 |
| 10～14 | 6,014,652 | 0.67 | 3,080,678 | 0.67 | 2,933,974 | 0.67 |
| 15～19 | 6,568,380 | 0.79 | 3,373,430 | 0.80 | 3,194,950 | 0.79 |
| 20～24 | 7,350,598 | 0.94 | 3,754,822 | 0.95 | 3,595,776 | 0.93 |
| 25～29 | 8,280,049 | 0.92 | 4,198,551 | 0.92 | 4,081,498 | 0.91 |
| 30～34 | 9,754,857 | 0.91 | 4,933,265 | 0.91 | 4,821,592 | 0.90 |
| 35～39 | 8,735,781 | 0.95 | 4,402,787 | 0.96 | 4,332,994 | 0.94 |
| 40～44 | 8,080,596 | 0.97 | 4,065,470 | 0.98 | 4,015,126 | 0.96 |
| 45～49 | 7,725,861 | 0.95 | 3,867,500 | 0.96 | 3,858,361 | 0.95 |
| 50～54 | 8,796,499 | 1.22 | 4,383,240 | 1.24 | 4,413,259 | 1.21 |
| 55～59 | 10,255,164 | 1.83 | 5,077,369 | 2.02 | 5,177,795 | 1.67 |
| 60～64 | 8,544,629 | 1.91 | 4,154,529 | 2.13 | 4,390,100 | 1.74 |
| 65～69 | 7,432,610 | 1.87 | 3,545,006 | 2.03 | 3,887,604 | 1.75 |
| 70～74 | 6,637,497 | 2.20 | 3,039,743 | 2.31 | 3,597,754 | 2.11 |
| 75～79 | 5,262,801 | 2.58 | 2,256,317 | 2.66 | 3,006,484 | 2.53 |
| 80～84 | 3,412,393 | 3.12 | 1,222,635 | 2.93 | 2,189,758 | 3.24 |
| 85歳以上 | 2,926,704 | 5.53 | 810,898 | 4.72 | 2,115,806 | 5.92 |
| | | | | | | |
| 85～89 | 1,849,260 | | 555,126 | | 1,294,134 | |
| 90～94 | 840,870 | | 210,586 | | 630,284 | |
| 95～99 | 211,221 | | 41,426 | | 169,795 | |
| 100～104 | 23,873 | | 3,580 | | 20,293 | |
| 105～109 | 1,458 | | 178 | | 1,280 | |
| 110～114 | 22 | | 2 | | 20 | |
| 115歳以上 | - | | - | | - | |
| 再掲 15歳未満 | 17,521,234 | 0.64 | 8,971,683 | 0.64 | 8,549,551 | 0.64 |
| 15～64歳 | 84,092,414 | 1.07 | 42,210,963 | 1.08 | 41,881,451 | 1.05 |
| 65歳以上 | 25,672,005 | 2.41 | 10,874,599 | 2.42 | 14,797,406 | 2.41 |